曲直瀨事蹟　單

H20
485

曲直瀬正慶

医家なり、字は一溪、道三と称す。雖知苦斎、翠竹院、啓廸菴。又松子、盍静翁等の號を用ふ。初め僧となり相国寺に学び、後ち書を足利学校に読む、医を以て京中に鳴され名聲一世に囂し、天正年中、将軍義輝より以下の侯伯皆重禮を以て之を聘す。文禄三年正月歿す。年八十九、慶長年中、法印を追贈せらる。

右「日本人名辞彙」より抄出す。

鷗外藏書

東京帝國大學圖書印

B 23475

○今大路年譜

天正元年癸酉　有名なる一溪道三正盛、家督す。（此の年七月、織田信長足利義昭を幽して足利氏亡び織田氏の世と為る。此の年武田信玄卒す。）是れより、元亀二年辛未、一溪翁、啓迪集八巻を著す。

同二年甲戌　十一月十七日、天脈を診し奉り、啓迪集を叡覧に入る。翠竹院の号を賜ひ、勅して屠蘇秘方を授け、古今集を賜ふ。

同三年乙亥　信長、一溪の宅に到り、蘭奢待の名

木を賜ふ。
（此の年、信長、勝頼を長篠に敗る。）
同五年丁丑　元鑑（第三世、兵部親清生る。）
（此の年、松永久秀を誅す。信長叙内大臣。）
同六年戊寅　玄朔（第二世延壽院正紹）三之宮の
病を治して功を奏す。京都台花公の邸を賜ふ。
（此の年、信長叙正二位。上杉謙信卒す）此の翌年四月七日、秀忠公、濱松に生る。
同九年辛巳　玄朔、天脈を診し、御薬を奉る。
同十年壬午　三月十三日、玄朔叙法眼。

延壽院玄朔正紹

十行　廿字　東京相馬屋製

同十一年癸未　一溪、勅を奉じて道三の名を
玄朔に譲る。
（此の年、四月、秀吉、越前を取る。柴田勝家敗死す。
五月、秀吉、美濃を取る。信孝敗死す。）
同十四年丙戌　十二月四日、任法印。延命院の
号を賜はる。
（此の年、豊臣秀吉公の世となる。九月家康、
秀吉と和を媾ず。○三月二十一日、津梁公
［津軽信牧］生る。）
同十七年己丑　六之宮の病を治して功を奏

す。秀吉、寧の馬を賜ふ。（一説に十六年なりと
いふ。）
（此の年、瑞祥公〔津軽右近〕、馬鷹を太閤に献
じ、津軽一圓の璽を賜はる。）
文禄元年壬辰 秀吉公に従て朝鮮を征す。朝鮮
に獲る所の啓迪集、并に銅壺の印を賜はる。
二月二十八日、元盤任典薬助。
（此の年三月、秀吉、加藤清正・小西行長等を
遣はして朝鮮を伐たしむ。）
同二年癸巳 天脈を診す。 橘姓、今大路氏を賜

十行 廿字 東京相馬屋製

ふ。
（此の翌年、始めて千住に橋を架す。是を千住
の大橋といふ。）
同四年乙未 正月四日、一渓翁卒す。贈法印。
（此の年、秀次自殺す。）
後 慶長二〔三〕年丁酉〔戊戌〕 帝の病を治して功を奏す。金之
花生を賜はる。
（此の年八月十八日、秀吉公薨す。）
前 慶長二年丁酉 勅を奉じて、延命院を改めて延
壽院と称し、永く子孫に傳ふ。

同四年己亥　始めて白散を関東に献す。自今年々献上す。

十二月二十三日、元鑑、法服を毎ぬ。

同十三年戊申　上総、下総、二國の内に於て、高七百石を元鑑に賜ふ。

四月五日、元鑑任法印。

兵部元鑑清親

同十五年庚戌　四月十九日、玄朔、家系を元鑑に譲る。

同十九年甲寅　元鑑、大坂の御陣に従ふ。

（此の年大坂冬陣和す。）

元和三年丁巳　玄朔、城州五百石の領地を、旧の如く領すべき旨、御朱印を頂戴す。

同八年壬戌　十月八日、元、（玄鎮の？）大猷公の御小姓と為る。

同九年癸亥　元鑑、東福門院の難産を治して功を奏す。台徳公、脇差を賜ふ。

八月二十三日、玄鎮任典薬頭、叙五位。

（此の年七月二十七日、家光、将軍宣下。）

寛永元年甲子　玄鎮、上京して　天脈を診す。大猷

公より馬を賜ふ。
同二年乙丑　元鑑、台徳公に従て上洛す。馬を賜ふ。
玄鎮、大猷公に従て上洛す。
九月十九日、元鑑卒す。

民部玄鎮親昌

同年嗣く。
同五年戊辰　玄朔、台命に依て、素絹の衣、紫の袈裟を着く。子孫永く之を用ゆ。
同六年己巳　玄鎮薙髪して道三と改む。
玄朔、麻布村薬園に於て地を拝領し、一寺を建つ。祥雲寺と号す。
同八年辛未　十二月十日、玄朔翁卒す。
玄朔、元鑑両領地合せて千二百石、并に玄鎮に賜ふ。
同十一年甲戌　七月、玄鎮、大猷公に従ひて上洛す。
同十三年丙子　玄鎮、大猷公に従て日光に詣づ。
三月十八日、玄渊生る。
同十六年己卯　四月二十三日、玄鎮卒す。

兵部玄渊親俊

此の年嗣く。

十行廿字　東京相馬屋製

同十七年庚辰　大奥ニ於て大猷公ニ謁す。
秋、澤庵其の器を称す。
正保元年甲申　上京勤学す。
同三年丙戌　江戸ニ帰る
寓の薬園（俗云。此四字不明。想フ暫委薬園於淳之
預官意。）
再ひ上京勤学す
慶安三年庚寅　江戸ニ帰る
同四年辛卯　十二月二十九日、任典薬頭。叙従五
位下。

（此の年四月二十日、大猷公薨す。　七月十二
日、由井、丸橋謀叛発覚す。　八月十八日、家綱
公将軍宣下。）
承應元年壬辰　正月元日、直垂を着て登城す。布
衣白丁侍す。
同二十二日、上京して天脈を診す。
同二年癸巳　十月、日光拜礼。
（此年、三月、獨立長崎ニ来る。）
明暦三年丁酉　十二月十九日、薙髪して道三と
号す。

（此の年、林道春卒し、新井白石生る。）

万治三年庚子　素問考五巻を著す。

（此の年七月十八日、伊達綱宗不行跡に付き逼塞。十一月三日、佐倉城主堀田上野介正信、所領没収、嫡子帯刀へ新規一万石を賜ふ旨）

寛文三年癸卯　四月、嚴有公に従て日光に詣づ。

同五年乙巳　命を奉して、素絹の衣を著る。

同六年丙午　玄寅生る

同十一年辛亥　医学入門私考九巻を著す

延宝二年甲寅　常山方を校正す

同三年乙卯　四月二十四日、玄耆生る

同四年丙辰　医戒八巻を著す

天和元年辛酉　十二月二十七日、嫡玄寅親民任典薬頭。称兵部大輔。

同三年癸亥　台命に依て、家方延齢丹等数方を献ず。

閏五月七日、玄淵、延壽院と号し、玄寅薙髪して道三と号す。

貞享三年丙寅　二月十二日、玄寅卒す。

五月二十二日、玄淵卒す

遺物雪舟の画を献上す。

式訂玄老日記

此の年七月十日家督。

同四年丁卯　正月三日、長袴年始登城。

元禄三年庚午　十一月二十六日、任典薬頭。

同四年辛未　正月元日、直垂を着て登城す。

四月上京して天脈を診す。

同五年壬申　十二月十一日、剃髪して道三と改む。「辰盛が門下に在りしことは此の頃のこと也」

同九年丙子　関東より唐薬を献上す。自今半井と一年代はりに勤む。

同十一年戊寅　九月二十一日、道三河岸の邸を差上ぐ。十月十二日、常盤橋内に於て代地を拝領す。

享保八年癸卯　六月朔日、官庫医書吟味被仰付。

同九年甲辰　八月九日、元勲始めて有徳公に謁す。

同十二年丁未　十二月十八日、元勲任典薬頭。

同十三年戊申　四月、日光供奉。

八月十一日、命を奉じて局方を校正す。

同十四年己酉　四月七日、命を奉じて普救類方

十行　廿字　東京相馬屋製

の名を題し、并ニ序を作る。
六月十三日、奥医師被仰付。
十月十八日、御鷹の鴈拝領。
同十五年庚戌　元勲、上京して天脈を診す。
元文元年丙辰　元勲剃髪して道三と改む。
同二年丁巳　閏十一月二十九日、玄耆卒す
民部元勲
此の年、十二月二十四日嗣ぐ。
延享三年丙寅　九月八日、依願日比谷内邸ニ移る。
寛延元年戊辰　朝鮮人来聘す。台命ニ依て對診

十行 廿字 東京相馬屋製

す。
宝暦四年甲戌　十一月二十五日、壽國始めて惇信公ニ謁す。
同五年乙亥　十二月十八日、壽國任典薬頭。
同七年丁丑　壽國上京して天脈を診す。
同九年己卯　六月十四日、元勲卒す。
兵部壽國
此の年八月六日家督。
九月七日、剃髪して道三と改む。
明和四年丁亥　七月六日、壽福卒す。
式部正福
此の年、九月四日、家督。

安永四年乙未　閏十二月十八日、始めて浚明公
ニ謁す。
同五年丙申　十二月十六日　任典薬頭
式部大輔元亮　内匠助　昆弟　雄五郎　中務大輔　右京大夫　左京大夫
これより以下不明。只抽斎、文化十四年丁
丑十一月廿五日、今大路中務大輔様へ代弟
ニ入、継目済」の一節をよみてをはるのみ。
嘉永五年壬子　正路卒　同年右近嗣くとあり。

十行　廿字　東京相馬屋製

贈正五位曲直瀬道策家

京都市高倉御池上ル松崎又三郎方

未亡人　曲直瀬徳行院

曲直瀬道策は京都の人、向日明神の神主、六人部美濃守雅香の次男なりしが、曲直瀬亨徳院正元の養子となりて、其家を継ぐ。曲直瀬家は近江源氏佐々木の支流にして、永禄、元亀の頃、道三といへる者、医術に精しく学問に優れたるを以て名医の誉高かりしが、正親町天皇御脳あらせ給ひしを拝診の御命を蒙り、治方験ありければ、天眷浅か

らず、寝翰並に翠竹院の號を賜はり又鄰地をも下されて常に宮掖に奉仕する事となれり。故に将軍家を初め、諸侯伯に至るまで皆尊崇して其治療を乞はざるはなし。我邦中世以後医学大に衰へ克く之を攷究する者あらざりしに、道三は李朱の二家を表標として益々精微の理を究めければ遂に一機軸を開き、軒岐の術をして再び世に顕はれしめたりといふ。文禄三年正月没す。年八十九。著す所、啓迪集。正心集。指南鍼灸集。医燈配剤等数部あり。之を中興の祖となす。爾後子孫世

々朝廷の医官となる。又加賀藩主よりも若干の扶助米を受けて、医療の事を嘱せられたり。道策は現に翠竹院が十三世の孫にして、資性温和篤実。必ずしも武人粗暴の状なかりしも、夙に幕府の横政を見聞し。慷慨の情に堪へず。如何にもして王政を恢復せんものとて千々に心を砕きたり。蓋し其実父雅香は平田篤胤の門人にして国典に通暁せしを以て、道策も幼きより其学風を受け、自ら斯の如き志をいだきしものならん。折節慶應二年の七月ばかりに、加賀藩主前田慶寧京都に

登る由聞えければ、道策も言はよき機会なりとて宗匠六人部雅楽、友人北島秀穎、大都伊那[redacted]分等と御議を凝らし慶寧に謁し勤王の大義を説き、西南の雄藩と同じく王権挽回の謀をなさしめんと志し、大内裡の当面を初め建白書を懐ろにして慶寧を途に要し、之に説く所あらんとて、幾多の辛酸を嘗め、漸やくにして洛中をまで近江路に差掛りしに、いかなる障りやありけん、慶寧が上京のこと俄かに延引となりて発輿なきよし聞き伝へ、道策が隠やるかたなけれど、今更いかんともせんすべなし、然も四人謀を取りて、金澤の城下は事近からんものと、志を決し道策も書きし文は、外に着きしは其月の末つかたなり。○既にて四人相議して藩吏の綺手を求めて、慶寧に謁し、こまごまと其旨書の趣旨を述ぶ。此折よめる歌に、

大君につかへまつらん心より
身のうさをもおもはざりけり

其後幾程もなく慶寧上京の事定まりて又元閣のありければ道策等も急ぎ京都に立返[redacted]り何とか

して彼の藩論を引き起し、勤王の魁けを
なさしめんものと、前田家の姻族なる三條西公允
に謁し慶寧をして勤王一途に立たしむる様説
き諭し給へと、切に懇望せしに、公允も其志に
感じ、快よくうけがいたりといふ。又里見次郎
鯉沼伊織等有志の士にも親しく交はりて国
事に関し密に協議せしことありとかや、かくて
道策は東奔西走少しも其労を厭はざるのみ
ならず、或は勤王有志の士に交はり、或は清議
同志の士をかくまひなど、種々の事に盡力せし

為め、殆ど家産を蕩盡して餘贏なきに
至れるも、毫も顧念する所なかりき。此時に當
り諸国の浪士、近畿の間に来り集まり、其生計
の方策も之を弄する程のもの、漸く多くなりゆく
まゝに、道策は薩州の小松帯刀清廉、江州の三上
兵部、紀州の陸奥陽之介故宗光伯、對州の島正作
等と相謀り、一船舶を買入れて、物貨運輸の
業をなし、其利し得たる所のものを以て、有志
の士を養ふ資金となすのみならず、平生は其
人々を船中に潜匿せしめ、或は其徒を諸藩に斡

して、人知れず勤王諸藩の声援をなし、或は海島に據りて、士の心を安からしめんには、一挙両得の策ならんと、評議一決になりたれども、其資金巨萬を要する事なれば、いかがはせんと更に相談し、遂に近畿地方の富豪を諭して其資金を募らんものと、おのおの方面を定めて其事にかゝれり。乃ち樹下義国は酒田伊[redacted]丹に、三上兵部は大阪に遊説し、陸奥陽之助は船舶買入れのため外国人と談判し、道策と島正作は同じく大阪に赴き全国首府の事に盡力せしに、此事

早くも新撰組の探知する処となりて、此事を果すあらんと企て、密に狙ひをつけしとぞ。これよりさき正作は京都薩摩藩の邸に在りしに、同藩の富山某といふ者、正作が許に至りて金銭の無心などいなす事屢なりしが、其後彼は新撰組に加はりて正作を刺殺さん事を謀りしも、正作は疾くこれを悟りて身を護る、いと厳重なりければ富山もせんすべなく大阪に下り行きたり。其後道策の寓居を尋ね来りて、談話の末、種々無礼の事をいいかけなどして立去らずありけ

れば道策殊に當惑し、佐をもて外にあそびしめんと謀り、僕三人を伴ひ佐を誘ひて寓居を立ち出でしは夜の九ツ時頃なりき。途中より三人打ちつれて藪は新地にさし掛りし折。富山は時こそと一刀ひきぬき不意に後ろより切りつけ、なれば、道策卑怯と叫び太刀に手をかけ、手かけば抜きかけしも、頭部の疵や深かりけん、其儘どうと倒れて息絶えたり。實に慶應三年五月二十五日の事にして年は三十と聞ゆ。道策容貌魁偉といふ程にあらざりしも、修面長身、

氣品自ら備はりて犯すべからざる風あり。日常に王室の式微を嘆き、神祇官を設けて祭政一致の古制にかへらしめん旨を、かきつゞりて堂上の手許にさゝげたる事もありといふ。其配曲直瀬氏は貞操正しく學問も優れし人なりしかば、此時より手づから髪を薙り德行院と稱し、稚き三人の子女を撫育して一心に丈夫の遺業を勵みありといふ。
明治二十四年十二月十七日特旨を以て佐池を追贈せられ正五位を贈らる。

右「勤王烈士傳」より抄出す、

備考　此勤王烈士傳は明治三十八年の編纂なれば、右由直胤未亡人の生存、其他履歴の現状等は今日の今状況に之を推勘する能はず、敢て疑を存す。